

# 日本舞踊における「見立て」と手話

## －日本舞踊と手話の共習の場を求めて－

長崎由利子

### 〈目 的〉

ある言葉を日本舞踊の「見立て」技法と手話の二つの方法で表現すると、手の動作が両者似た形になることが結構ある。この点に着目して、日本舞踊の「見立て」の基本的な型と手話を同時に習得できるプログラムを試作してみたいと思う。

### 〈方 法〉

- ① 日本舞踊で「見立て」を用いる代表的な言葉（手紙・乗馬・笛・三味線等）を選び、（イ）手話の日常会話にある言葉と、（ロ）手話の日常会話にない言葉に分類する。
- ② （イ）手話の日常会話にある言葉は、日本舞踊の「見立て」の型（A）と、それらの言葉を表現する手話（B）を把握する。続いて、同じ言葉について手話の手に日本舞踊の動きを加えたもの（C）や、日本舞踊の型を簡単にして手話的にしたもの（D）を新たに作成する。

#### 試作例（1）笛

A



B



C



D



笛を見立てた日本舞踊の「見立て」の型（A）から、手話の動作（B）に移り、足の型は再び「見立て」と同じにし手は手話の動作（C）をし、ここで足をまっすぐに戻して手は「見立て」と同じにする（D）。

- ③ （ロ）手話の日常会話にない言葉は、「見立て」の型を基本として、新しい手話を考えたり（E）、あるいは指文字でその言葉を表現しながら日本舞踊の踏む・すべる等の足の動きを練習

できるようにする（F）。

試作例（2）三味線

A



E



F



指文字 足

	し	ト
	や	ト
	み	コ
	せん	ト
	ん	ト

三味線を見立てた日本舞踊の「見立て」の型（A）から、立って体をまっすぐにして左手は人さし指と親指で輪を作り、右手は撥のようにして三味線を表現する手話を作成する（E）。次に、左手は輪のまま右手で“しゃみせん”の指文字をしながら、足をト・コ・トンと踏む練習をする（F）。

- ④ ①で選んだ言葉一つ一つについて、（イ）手話の日常会話にある言葉は（A）－（B）－（C）－（D）、（ロ）手話の日常会話にない言葉は（A）－（E）－（F）と各動作を連続して練習していく。
- ⑤ （A）から（F）の各動作間で扇子・手ぬぐい等の小道具の持ちかえを円滑にするために衣装中の抱え帯を工夫して、随時小道具を貼りつけて次の動作に移るようにする。

### 〈結果・考察〉

上記のようなプログラムを組むと、本来は違う目的で別々の場所で習得することが普通とされる日本舞踊（A）と手話（B）が一つの場で共に習得（共習）でき、加えて両者の性格を併せ持つ新しい身体表現（C）・（D）・（E）・（F）にも挑戦できる。つまり、芸能である日本舞踊（舞）と聴覚障害者の会話（Talk）手段である手話を一体化して共習できるようにしたわけで、これを“舞Talk”と呼ぶことにする。“舞Talk”が実現すれば、日本舞踊に興味をもつ聴覚障害者にとっては日本舞踊をより身近なものとして体験する契機になり、健常者は芸能を習得しながら聴覚障害者理解へとつながっていくだろう。さらに、日本舞踊の「見立て」が手話の日常会話にない言葉を手話化する一助になればと思う。